

関学相撲部と学生相撲の変遷について

—昨今及び今後のグローバル時代への対応を踏まえて—

相撲部 石坪昭宏（昭和 45 年卒）

1. 相撲の基本と歴史—関西学生相撲のはじまり、学生相撲について—

【相撲の基本について】

「相撲の戦い方」競技の形態としては、直径 4.55m（15 尺）の円形または四角形をした土俵の中で廻しを締めた二人が組み合って勝ち負けを競う。土俵から出るか、地面に足の裏以外がついた場合、もしくは反則を行った場合、負けとなる。判定は行司（アマチュア相撲では主審と呼ぶ）が行う。

「塵手水（ちりちようず）」大相撲の作法のひとつ。蹲踞（そんきょ）の姿勢で拍手を打ち、両手を広げた後、掌（手のひら）をかえすもの。相手に対して何ら武器を持っていない、素手で正々堂々と戦うことを知らしめる意味。

「蹲踞（そんきょ）」体を丸くしてしゃがむ、または膝を折り立てて腰を落とした立膝をついた座法を言う。

「仕切り」円形の土俵に入り、最初はやや離れて立ち、互いに顔を見合わせ、腰を落とし、仕切り線に拳をついて準備するのを仕切りという。仕切り線は長さ 70cm、幅 5cm 相手との間隔は 70cm。

「立合い」拳をついた状態から、互いに目を合わせ、両者同時に立ち上がり、ぶつかる。この試合の始まりを立合いという。

「勝ちの確定」勝ちが決まるのは次の場合である。相手の体のうちで、足の裏以外の部分を土俵の土に触れさせた場合と相手を土俵の外に出した場合。

「相撲の攻め手」離れた状態から、ぶちかまし・喉輪・突っ張り・張り手・足払い等の攻め手を用いる立ち合いにより、優位な状況をつくり触れあった状態で押す。

「相撲の組み方」力士同士のお互いの組み方として四つ身と言う組み方があり、右四つ・左四つ・手四つ・頭四つまたは外四つ等がある。

「決まり手」勝敗が決したとき、技によるかを判断したものが公式な決まり手として、投げ・掛け・反り・捻りを中心にし、82 の技名と技でない決まり手・非技（勇み足など）5 手を決めており、そのどれかに分類される。相撲の禁じ手は、次の 8 つを行うと反則負けとなり、またアマチュアは 9 つ（+張り手）。握りこぶしで殴ること。頭髪を故意につかむこと。目やみぞおちなどの急所を突くこと。両耳を同時に両手で張ること。前立揮をつかみ、また横から指を入れて引くこと。喉をつかむこと。胸や腹を蹴ること。1 指または 2 指を折り返すこと。

〈日本相撲協会 HP より〉

「相撲の鍛練法」受け身・鉄砲・四股・摺り足・股割・ぶつかり稽古等。



写真は現・宇良関（当時教育学部3年生）による四股実演（写真提供：執筆者）

【相撲の歴史】

「神話の時代」～「天覧相撲」～「上覧相撲」～「勸進相撲」～「大相撲」

江戸時代後期に入り、相撲会所が整備され、相撲年寄りと相撲部屋も次々と誕生。雷電や不知火が活躍した時代。昭和に入り、土俵の危険な4本柱も撤廃され、戦前のラジオ中継に続きテレビの中継、平成になり衛星中継も始まった。近年、相撲は国民的な娯楽になり、近代スポーツとしての固たる地位を獲得した。

【関西学生相撲の始まり】

明治34年、師範学校で課外時間に相撲練習を行う。その後日露戦役も終わり、漸く相撲は国技として、学校の運動会等で余興に広く行われた。明治40年頃から腕自慢の学生が草相撲、宮相撲、夜相撲等に飛び入りする者も増え、明治39年6月、大阪毎日新聞社が浜寺公園に海水浴場を開設し、その3年後、同海水浴場で同社主催のもと関西学生相撲が開催された。

【学生相撲について】

「学生相撲の発展」大正から昭和初期、学生相撲は大相撲以上に人気と活況を誇り、毎年秋に堺市で行われる学生選手権は満員の観客を集め、応援の熱気はすさまじかった。当初は、早慶両校を中心とした争覇が続いたが、やがてこれに拓殖・関西・関西学院など他校が割って入り、熱戦を繰広げた。しかし学生相撲一線級選手の大相撲入りは殆どなかつ

た。戦後すぐ、紅陵大（現・拓大）出身の吉井山は幕内までスピード出世し、昭和30年代には学生出身力士が徐々に増加。中央大出身の大塚範が豊国で小結まで、東農大出身の内田勝男（時津風・初代豊山）は大関にまで上り、学生相撲ブームが巻き起こったのは、昭和45年。2年連続学生横綱の輪島（花籠部屋）がプロでも横綱に、同時期に東農大の長濱（時津風・2代目豊山。最高位関脇）が相次いで角界入りした。学生相撲のトップクラス選手の角界入りが日常茶飯事となり、しかもその多くが関取となり、華やかな活躍をして、学生力士が大相撲の一大勢力を形成し、アマ・プロの実力が接近したという声がかかるようになった。

「学生相撲の問題点」競技人口の少なさである。出場大学が約40校、インカレ参加者は、セミプロ級の一流選手から、大学に入ってはじめて相撲を取った素人選手まで200数十名。技術の二極分化。上は日大を頂点に高校からスカウトされた一流選手から下は大学に入り初めてマワシを締めた者と二つの異なるスポーツが同居している。ちびっこ相撲から始まり、中学・高校・大学となるべきものが、中学でつなぎとめることが出来ず、消えるケースが多い。これは思春期を迎える中学生たちが臀部を露出するマワシをいやがることが主因。

2. 関学相撲部百年の歩み、現状と今後

大正年代：2年兵庫県学生に竹野優勝。8年大毎全国学生に出場。14年関西学生大会、団体優勝、個人1位・大守。15年岡添、学生代表として渡米。

昭和年代：2年関西学生1位、全国学生3位、3年関西学生1位・個人松浦優勝、6年全国学生で初めて王座、8年関西大学専門選抜に団体優勝。9年全国決勝、拓大5－0関学、個人、同10年全国決勝、拓大4－1関学。11年全国決勝、拓大3－2関学。拓大の壁は厚い。

13年1月、全日本選抜で団体優勝、個人も木村優勝。15年神宮で初めて団体優勝。全国は井口個人優勝。16年関西学生9連覇。17年全国学生高専に優勝、神宮にも優勝。21年の全国で団体・個人（中村）を制したあと、23年から学生角界の双葉山の有光一を擁して黄金時代を築き、23、25、26年と学生横綱3回（24年は準優勝）という破天荒の偉勳を立て、23年の団体制覇、25、26年の全国優勝の大黒柱となった。

その後は西日本での一部死守するも、上位に食い込めず。47年、ついに西日本二部転落から暗黒時代を向かえ、低迷続く。

平成年代：平成に入っても、そのまま低迷が続き、何度も廃部の危機に見まわれたが、11年に西日本一部復帰を果たし、椿本が一部個人優勝。全国でもAクラス復帰し、12年には、全国大学選抜宇和島及び宇佐で団体ベスト8、西日本学生でも団体一部4位までに復活した。

しかし、13年には再び西日本二部転落し低迷続き、19年には部員1名となり休部寸前に陥った。幸いにも在学1回生より相撲部希望者が現れ、一気に4年間で部員6名にまでなり、21年には悲願の西日本団体一部復帰した。その後他大学のレベルアップにより二部転落となり、部員11名に増えたが、そのまま現在に至る。

しかし、全国学生個人体重別では17年に75キロ未満級で初めて田中（当時レスリング部）が優勝、23年には宇良が65キロ未満級で優勝、24年は渋谷が75キロ未満級で優勝、25年で田中が75キロ未満級で優勝、近年の相撲グローバル化もあり、ついに25年10月第2回世界コンバットゲームス（於・ロシア）で宇良が相撲・軽量級で金メダリストとなり、当部として初の世界チャンピオンを輩出した。宇良はその後、平成27年3月卒業と同時に関学相撲部（創部124年にして）初の角界入りし、1年で新十両に昇進した。これは角界史上4位のスピード出世。〈関学相撲部百年の歩みより一部抜粋〉

【関学相撲部の現状】

宇良関が卒業の後、スポーツ選抜入試（2015年9月）で相撲部希望者の合格ゼロという悲惨な結果。相撲は大学から始めるケースは稀有なスポーツで、部員確保に大変苦慮している。現状（執筆時点）で、部員は4回生2名、3回生3名、2回生2名、1回生ゼロ。



（写真提供：執筆者）

【関学相撲部の今後】

宇良関の活躍を利用し、新人勧誘したい。理想を言えば毎年スポーツ選抜入試3名で経験者12名+大学からスタートの学生少々。部員数としては経験の有無に拘らず常時15名前後が理想。勿論、団体で西日本一部復帰、文武両道の精神から学業を優先させたく、特にスポーツ選抜入試入学者には早く一般学生の学力レベルまで到達させることを最優先。卒業時には自分が希望した先に就職出来るよう、社会人として順調に巣立つ指導・支援してゆきたい。

3. アマチュア相撲・国際相撲大会、世界大会、それにグローバル化

「相撲の国際化への経緯について」

明治末期以来「国技」と称される相撲であるが、1896年には初のハワイ全島相撲大会

が開催。1920年代が最盛期、大陸への遠征興行も試み、現在まで続く。近年は南米各地でアマチュア相撲が盛況にある。ブラジルでは、やはり日系人社会で1910年代から「素人相撲」が、戦後には日系人以外にも相撲広まり、次第に普及していった。1962年ブラジル相撲連盟が設立され、以降は日本の高校大会や国際大会に選手団を派遣、アマチュア相撲人口は日本より多い。アマチュア相撲の世界で進行した「国際化」は「相撲の普及」にほかならない。1995年「世界選手権大会」が発足したことによって相撲の「スポーツ化」が一気に進行しはじめた。近年モンゴル勢の出現は特記に値する。

「グローバル化への対応について」

(1) 出場可能外国人枠

大相撲：入門各部屋1名のみ。

学生相撲（アマチュア相撲）：団体戦5人制は2名まで、3人制は1名まで。個人戦は制限無し。

(2) 土俵マナー教育の徹底

学生相撲連盟は、相撲綱領に基づく指導を徹底。「礼に始まり礼に終わる」精神・特に勝った際の土俵上での「ガッツポーズ」は厳禁。相撲綱領の精神を徹底して各自に植え付ける。

(3) ドーピング制度の導入

学生相撲は既に導入済みで、上位3位入賞者には強制検査実施中。

(4) 国際相撲連盟の設置・運営

加盟国87か国。

4. 大相撲とアマチュア相撲

国技とは、一般には、その国の特有の技芸、国の代表的な競技のことである。日本で言えば相撲がそれにあると見做されることがある。大相撲の競技者を力士というが、アマチュア相撲の競技者の場合は力士とは呼ばない。大相撲による紹介とアマチュア相撲による普及と、二つの「国際化」のそれぞれの帰結には、今後の相撲の行く末を暗示するものがある。大相撲・アマチュア相撲いずれも、今まさに夫々の歴史の新しいページを開こうとしている。

5. 体育会経験と卒業後の社会人業務活動・三井物産→ジェトロ（日本貿易振興機構）

私の相撲に関しては、中3から高校・大学、その後も三井物産入社5年目まで、毎年国体の香川県代表として一般の部で出場し続けた。27歳で完全に相撲は辞めたが、その精神力で、大手商社の厳しい職場・ビジネス環境の下で6年間の米国での海外勤務も含め何とか大過なく定年まで33年間働き続けられたことは、相撲道を通じて培った忍耐力や文武両道の精神が発揮できたことに尽きる。今となっては本当に相撲をやってきて良かったと思う。総監督時代に創部125年にして初めての角界入り力士の関取誕生まで輩出した関学相撲部を今後も引続き後進への指導に注力したい。

新田一郎著『相撲その歴史と技法』（日本武道館、2016年）参考